

道

牧師 山本 護

礼拝堂と集会所からの坂道をぐるり下ると、木漏れ日爽やかな広葉樹の林です。礼拝堂建設の時に重機で敷地造成したため、赤土むき出しにされたものが幾らかの歳月に元々の植生が繁って、ずっと昔からここにあるかのような道になりました。里山にひっそり佇む古街道の趣さえ感じます。

逆に林から礼拝堂へゆるゆる登って行くと、数多の先達が歩いた道を思い、坂が幾重にもぐるり曲がっていくような幻想が浮かびます。もちろん教会の物語は、こんな穏やかな道だけではありません。底なしの謙虚さと空恐ろしい傲慢さ、驚くべき冒険心を併せもった教会の歴史が、公的にも私的にも濃淡取り混ぜてこの道から続いています。

「道というものは実におぼろげで、とらえにくい。とらえにくくておぼろげであるが、そのなかには象(カマ)がひそむ。おぼろげであり、とらえにくい、そのなかに物(実体)がある(老子)」。老子が言う「道(道)」の意味あいは、通行路というより、哲学的に磁力の中心とといったものでしょうが、案外私たちが歩んだ道と近いんじゃないか。

八ヶ岳伝道所の開拓は教団や教区の承認はなく、当事者である信徒や牧師にも、燃える幻をいだいて(使徒 2:17)、という麗しいヴィジョンはありませんでした。おぼろげで、とらえにくく、しかし委縮することなく道を進んでいくと、「象(カマ)」が形成され、キリストの体としての「物(人間)」が現れて、今年「八ヶ岳教会」になろうとしています。

とらえにくく、おぼろげな感覚を私たちは信頼し、やがて歓迎するようになりました。赤土むきだしの造成道にも力強い自然がひそんでいるごとく、祈りによって歩む道にはキリストの種子が鋤き込まれていることを経験したからです(マタイ 13:31~32)。

林から礼拝堂へ続く何でもない道。その作為のない敬虔さに憧れ、小さく讚美しました。「道に暮れゆきし旅人よ、仰ぎ、恵みの御神の御言葉を聞けや。憂いの雨は夜の間に晴れて、尽きせぬ喜び朝日と輝かん(讚美歌 522)」。Ω

